

ポスター報告要旨

1. 井上 さらさ INOUE Sarasa(清泉女子大学)

ロマネスクの教会建築におけるグリーンマン彫刻の神学的解釈の可能性

On the Possibility of a Theological Interpretation of Green Man Sculptures in Romanesque Churches

葉や蔦で覆われた、或いは形作られた人頭像であるグリーンマンは、ロマネスクの教会建築において、柱頭や持ち送り、門など、聖と俗の境界に多く彫刻されたモチーフである。従来の研究では、森の象徴や神学者ラバヌス・マウルスによる解釈を踏まえた肉の罪の警告として、或いは古代異教の神々を継承したモチーフとして理解されてきた。しかし、これらの解釈は断片的に提示されるにとどまり、教会という空間的文脈の中でいかなる神学的意味を持ち得るのかについては、十分に検討されてきたとは言い難い。以上を踏まえ、本報告では、グリーンマン彫刻の神学的解釈の可能性について再考したい。

2. 清水悠佑 SHIMIZU Yusuke(早稲田大学・日本学術振興会特別研究員 DC2)

レクシヨナリー形成期における例外的写本群

The Comprehensive Lectionaries of the Movable and Immovable Feasts in the 9-10th Century

イコノクラスム以降のビザンティン帝国では、福音書を典礼暦に沿って編纂したレクシヨナリーが発展し、数多くの写本が制作された。現存作例の多数は、復活祭を軸とする移動祭日を前半に記し、後半には、年間の固定祭日が記憶される。しかし、レクシヨナリー形成期に当たる 9-10 世紀制作の写本では、移動祭日と固定祭日を分割しない作例が一部確認できる。

本報告は、とりわけ形成期レクシヨナリーに散見される例外的な構成に対し、一定の解釈を試みるものである。

3. 宮田 暁乃 MIYATA Akino(慶應義塾大学)

サン・ガルガーノ礼拝堂における大天使ミカエル崇敬の可能性

—装飾壁画の図像学的再検討—

The Presumed Veneration for St. Michael the Archangel at Montesiepi: An Iconographic Reexamination of Ambrogio Lorenzetti's Frescoes

14 世紀半ば、シエナの画家アンブロージョ・ロレンツェッティはモンテシエピのシトー会サン・ガルガーノ礼拝堂に装飾壁画を制作した。本報告では、当地ゆかりの隠遁聖人ガルガヌスの列聖調査記録と聖域の地形的条件からモンテシエピにおける大天使ミカエル崇敬の可能性を検討し、左壁面 2 場面の図像分析により、その痕跡を明らかにする。さらに奥壁面《マエスタ》の聖母の持物構成が、ミカエル図像と共通する点を指摘し、両者の図像的重層性について考えたい。

4. 久保田 風史郎 KUBOTA Fushiro(慶應義塾大学)

機械式時計は何をもたらしたのか
—中英語アーサー王物語にみる後期中世の時間意識と運命の車輪—

What Did Mechanical Clocks Bring?: Late Medieval Temporality and the Wheel of Fortune in Middle English Arthurian Romances

ジャック・ル・ゴフなどにより、都市の発展、労働形態の変化、時計の普及といった事象との関係から、後期中世に時間意識の揺らぎが生じ、複数の時間の捉え方が併存していたことが論じられてきた。本報告では、こうした多層的時間意識の一側面を示す例として、機械式時計が運命の車輪の図像と結び付けられていたことを指摘する。さらに運命の車輪のモチーフを共有する二つの中英語ロマンス『頭韻詩アーサーの死』および『アーサーのワズリン湖奇譚』の分析を通して、時間と運命の主題が文学テキストの中でいかに表象されているかを検討する。

5. 春木 さくら HARUKI Sakura(東京都立大学)

中世後期カスティーリャにおける貴族のユダヤ人頭税徴収権の継承と都市支配
—グアダラハラの子メンドーサ家の事例—

Inheritance of Jewish Poll Tax Rights and Urban Governance in Late Medieval Castile: The Mendoza Family in Guadalajara

中世後期カスティーリャ王国では、王権に属するユダヤ人頭税収入が教会や世俗権力者に付与され、都市政治に一定の影響を及ぼしたと考えられるが、その具体的運用はなお十分に検討されていない。本報告では王国東部に位置する都市グアダラハラを対象に、メンドーサ家への徴税権付与の制度的性格と、その収入が修道院への寄進に転用された実態を検討する。特権付与文書・遺言状の分析から、徴税権が世襲的に譲渡されつつ家門内で再配分され、宗教施設への寄進を通じてメンドーサ家による都市支配の強化に寄与したことを明らかにする。

6. 立花 香里 TACHIBANA Kaori(同志社大学)

***The Canterbury Tales* への巡礼**
—木になる実のイメージを通して—

Pilgrimage to *The Canterbury Tales*: An Analysis of the Image of “Fruyt” on the Tree

Geoffrey Chaucer による *The Canterbury Tales* において、多様な身分や職業に属する語り手たちと作品全体の枠組みである巡礼との結び付きは明確ではないと指摘されてきた。一方で、物語内の「一本の木と悔悛の実」の比喩表現は、巡礼における信徒同士のつながりを象徴するという見方もある。本報告では、*The Canterbury Tales* の中の木になる実のイメージに着目し、その典拠となる教化文学や説教と対照しながら、巡礼者たちが物語の語りを通してどのように信仰共同体 *corpus mysticum* の形成に寄与しているのかを考察したい。

7. 番井 大斗 BANI Daito(京都大学)

イタリア系ギリシア聖人伝における「自己」像と「他者」像の形成
—『聖ネイロス伝』の分析をもとに—

Construction of the 'Self' and the 'Others' in Italo-Greek Hagiography: An Analysis of the Life of St
Neilos from Rossano

ラテン、ビザンツ、イスラームという 3 文化圏のはざまに位置した中世前期の南イタリアでは、東方正教系の修道士たちがその文化圏の境界を越えて活躍した。近年の先行研究は、彼らの生涯を記した聖人伝の叙述が、書き手である聖人伝作者と読み手となる地域共同体の相互作用のもとに形成されたことを指摘している。本報告は、それら聖人伝の代表例とされる『聖ネイロス伝』(11世紀初頭)を取り上げ、「自己」と「他者」の表象に注目し、その叙述が形成されたプロセスを考察する。

8. 池田 拓実 IKEDA Takumi(早稲田大学)

中世後期イングランドの特権領と周辺社会
—ダラム司教とニューカースル・アポン・タイン市によるタイン川をめぐる争いから—
Liberties and their Neighbouring Societies in Late Medieval England: The Conflict over the River Tyne
between the Bishop of Durham and Newcastle upon Tyne

ダラム司教とニューカースル市は、タイン川に対する権利をめぐる争いを経て、13世紀から16世紀にかけて争ってきた。この争いの過程で王権/議会へ提出される請願や裁判記録を見ていくと、ダラム司教の特権・特権領が周辺社会に対して与えた影響力だけでなく、ニューカースル市がダラム司教の特権・特権領をどのようにとらえており、それにどのように対処したかが見えてくる。

9. 徳永 裕太 TOKUNAGA Yuta(東京藝術大学)

殉教・聖体・聖餐
—ディーリック・バウツの 2 つの殉教を中心に—

Martyrdom, Eucharist, Holy Sacrament: Dieric Bouts's Two Images of Martyrdom

ディーリック・バウツによる《聖エラスムスの殉教》(1460年頃)と《聖ヒッポリュトウスの殉教》(1470-1479年頃)は殉教場面を中心主題としており、中世末期ネーデルラントでは稀有な作例である。その図像的源泉の探求や図像解釈は数多く試みられてきたが、作品に内在する機能については未だ明らかにされていない。本報告では、バウツが触れたであろう大学創立期ルーヴェンにおける神秘思想を手がかりに、聖餐兄弟会における殉教のイメージの機能を考察したい。

10. 小森紗季 KOMORI Saki(大阪公立大学)

14 世紀初頭トゥールーズ東部地域における「善き人」の信仰拡大について

The Spread of the Belief of the ‘Good Man’ in the Eastern Region of Toulouse in the Early 14th Century

本発表は 14 世紀初頭トゥールーズで異端審問官として活躍したベルナール・ギィの『判決集』を用いて、14 世紀初頭のトゥールーズ東部地域における「善き人」の信仰拡大過程を明らかにするものである。この地域は先行研究においてあまり注目されていないものの、異端審問にかけられた被告人が一定数存在する。そこで、本発表では異端審問にかけられた人々が「善き人」とどのように関与し、彼らの信仰をどうとらえていたのかについて考察する。

11. 伊藤 光 ITOH Hikaru(東京都立大学)

教会領の抵当化と委任

—14 世紀ザルツブルク大司教領に注目して—

Mortgage and Delegation of Ecclesiastical Principalities: An Analysis of the Prince-Archbishopric of Salzburg in the 14th century

14 世紀のザルツブルク大司教ピルグリム二世(在位 1365～1396)は 1370 年に属司教であるパッサウ司教から司教領を 7 年間、1389 年にバルヒテスガーデン修道院から修道院領を 6 年間委ねられた。本報告ではこの教会領の委任という珍しい事例を教会領の抵当化の事例と比較検討する。この検討を通じて、大司教の統治において教会領の抵当化と委任がそれぞれどのような役割を果たしたのかを明らかにしたい。

12. 畠山 翼 HATAKEYAMA Tsubasa(早稲田大学)

迫害と生成

—ベガン運動の拡大と変容をめぐって—

Does Persecution Make Heresy? The Beguin Movement in Languedoc, c. 1280–1330

本発表では 1280～1330 年代にかけてラングドックに存在したベガンという男女の平信徒を中心とした信仰集団を対象に、1317 年以降「異端」として弾圧されたことを通じて彼らが構成員の質的な拡大と教義上の変容を経験したことを示す。根拠となる史料としては、1299 年のベジエ管区教会会議の決議文及び異端審問記録を用いる。この分析を通じ、弾圧者と被弾圧者の相互作用によって「異端」が生成される可能性を提示する。